14 毛虫皮膚炎におけるアレルギー反応の関与
夏秋 優 (兵庫医大皮膚科) Allergic reactions
in caterpillar dermatitis Masaru Natsuaki

毛虫皮膚炎は鱗翅類幼虫の有毒毛に触れることによって生じる皮膚炎である。原因としてはドクガ類の毒針毛によるものが多いが、中でもチャドクガによる被害が多い。チャドクガの毒針毛に触れた場合、初期は膨疹・紅斑が出現し(即時型反応)、1~2日後には丘疹を形成する(遅延型反応)例が多いが、この臨床経過には個人差がかなり認められる。今回、チャドクガ毒針毛から毒成分を抽出し、HPLCで分析すると共に、ゲル濾過による各分画(分画1~8)を用いて皮内テストを施行した。その結果、分画3、4(分子量約2~4万)で即時型反応、および遅延型反応が認められた。さらに、この分画を用いて健康人志願者10名で皮内テストを行ったところ、即時型反応のみ、遅延型反応のみ、両方の反応が陽性、いずれも無反応、の4つのパターンが認められた。

以上のことから、チャドクガ毒針毛による皮膚炎は毒成分に対する即時型、および遅延型のアレルギー反応によって生じ、感作状態の差によって皮膚反応には個人差があるものと思われた。

16 基布加工された防ダニホットカーペットの室内塵性ダニに対する増殖抑制効果について 杉浦 実(愛研) Effect of the thermal carpet with backing fabrics processed insecticide against the house dust mite, *Dermatophagoides farinae* Minoru Sugiura (Aiken)

硼酸系セラミックス(商品名:セグロセラ、石塚硝子)が基布に加工されたホットカーペットのコナヒョウヒダニに対する増殖抑制効果について準実地試験を行った。試験に用いた2畳用ホットカーペットはその1/2面積だけを加熱することによって加工品(加温)区、未加工品(加温)区、加工品(室温)区、未加工品(室温)区の4試験区に分け、各々10cm×11cmのカーペットを16枚ずつ用い、カーペット1枚に対しダニ増地1g(生存ダニ2765匹を含む)をばらまき試験を開始した。試験期間中の室温は、ホットカーペットの使用時期である冬季を想定し20℃程度とした。その結果、未加工品(室温)区の生存ダニ数は試験開始4週間後まではほぼ横這いが続き、その後ダニ数の減少が見られたのに対し、他の3試験区は試験開始からダニ数の減少が見られ、特に加工品(加温)区はその減少が大きかった。したがって、下部からの加温によってカーペット表面へのダニの逃避行動が起こり、蒸散しない本薬剤の場合「接触頻度の減少=薬剤効果の低下」となるため、薬剤加工の有意性が懸念されたが、本試験によってホットカーペットとして使用した場合でもダニと薬剤の接触は十分にあり薬剤効果が得られるだけでなく、加温処理との相加効果があると考えられた。

15 乳幼児アトピー教室受講者の室内塵性ダニ類の調査
中嶋智子○、鶴鷹圭三、降井佐太郎、井上壽(京都府保健環境研究所) Survey of House Dust Mite in Kyoto Prefecture. Satoko NAKAJIMA, Keizo UTAKA, Sataro FURUI and Hisashi INOUE (Kyoto Pref. Inst. Hyg. Environ. Sci.)

京都府内3保健所管内で行われた乳幼児アトピー教室の受講者家屋を対象に1997年から3年間で、48家庭、142件の室内塵性ダニ類の調査を行った。試料採取には、神東塗料製のダストチュッカーを用いて行い、200メッシュ塵100mg中のダニ数で比較した。

200メッシュ塵100mg中のダニ数は平均して、ふとん409匹、畳385匹、板間118匹であった。そのうち、チリダニ科のダニは、すべての検体から検出され、平均して、ふとん352匹、畳197匹、板間60匹であった。

検査家屋の所在地を京都府の北部日本海側の地域と南部で分けて、チリダニ科中のコナヒョウヒダニとヤケヒョウヒダニの存在割合を比較してみた。北部地域では、コナヒョウヒダニが平均して、ふとん30%、畳47%、板間30%で、ヤケヒョウヒダニが各々69%、51%、67%であった。南部地域では、コナヒョウヒダニが各々72%、72%、86%で、ヤケヒョウヒダニは各々27%、28%、14%とヤケヒョウヒダニの存在比が低くなり、地域差がみられた。同時に実施したアンケート調査による家屋の形態や築後年数、掃除の頻度などに差は見られず、両地域の気象条件等の違いが、2種のチリダニ科の発生に影響した可能性が考えられた。

17 *Ixodes holocyclus* 咬着による顔面神経麻痺の1例
○橋原康弘、岡本紀久(保健衛生大・衛生・医動物)曾和順子、有馬豪、鈴木加余子、松永佳世子(同・医学部・皮膚科)早川敏(同・病院検査部)山本結子(同・医学部・神経内科) Facial paralysis resulting from tick(*Ixodes holocyclus*) bite Yasuhiro Kusuhara, Kiku Okamoto, Jyunko Sowa, Masaru Arima, Kayoko Suzuki, Kayoko Matsunaga, Satoshi Hayakawa and Hiroko Yamamoto

今回、我々はオーストラリア旅行中にダニ咬症に罹患し、帰国して虫体切除術後、腫脹と紅斑が増強した症例を経験したので報告する。症例は、35歳、女性。主訴は有痛性皮疹。現病歴は、平成12年1月5日からオーストラリア旅行中にケアンズにてジャングルツアーに参加、同日頃より右側頭部に軽度の疼痛を伴う皮疹が出現し、徐々に増大した。帰国後、近医受診するも放置され、1月16日当院受診し、右側頭部に直径約6mmの虫体を認め、ダニ咬症と診断、ダニを正常皮膚組織を含め切除した。18日、腫脹、紅斑がさらに増強し右顔面麻痺も認められ、入院となった。抗生物質点滴投与にて加療し切除10日後には、顔面の腫脹、紅斑はほぼ消失し、顔面神経麻痺は切除後約1ヶ月後に完治した。ダニは、当教室にて調べた結果、*ixodes* 属の特徴である逆U字型の肛門溝が観察されたこと、第1~第4脚基節に外棘が認められたことから、*Ixodes holocyclus*と同定した。*Ixodes holocyclus*は、オーストラリア東部に広く分布するが、当地区には観光地も多く、日本からも多数の観光客が訪れている。今後このような症例も増加することが考えられるため、動物との接触や、ジャングルツアーなどには十分な注意が必要であると思われる。